言葉という凶器

郡山市立明健中学校 3年 別府 さくら

私は自分の名字が大嫌いだ。小学校に入学したばかりの出来事だった。それまでは自分の名字が嫌いだなど一度も思ったことがなかった。それどころか「別府」という名字をあまり聞かなかったため、特別感さえ感じていた。しかし、クラスメイトの一言で私の考えは一変してしまった。

いつも通り仲の良い友達と休み時間に話していると、後ろから一人のクラスメイトが私を「ゲップ」と呼んだ。時間が止まったかのように教室が静まり返り、とたんに皆の笑い声が教室内に響いた。私は何が起きているのかわからず、私を呼んだクラスメイトになぜ「ゲップ」と呼んだのかを尋ねた。

「お前の名字ってなんか変だろ。『別府』より『ゲップ』のほうが面白くて絶対良いと思うんだよ。お前もそう思うだろ。」

私は頭が真っ白になった。それと同時に、いかりと悲しみと自分の名字は変であるという恥ずかしさが一気に押し寄せてきた。私は何も言い返すことができなかった。すぐに先生に相談しようとも思ったが、先生にも笑われるのではないかという不安から相談できずに下校時刻となってしまった。下校中は、母へ相談しようか、母が悲しむかもしれないから相談しないほうが良いか当時の私なりに必死に考えた。その日の帰り道はいつもよりも家が近く感じた。家に入ると母が明るく「おかえり！学校どうだった？」と声をかけてくれた。私は今言うしかないと思いつつも、母の悲しむ顔が脳裏に浮かび、精一杯の笑みを作って「楽しかったよ」とできるだけ明るく言った。母は少し寂しそうに「そっか」とだけ言った。結局、その日は誰にも相談することができなかった。翌日、学校に行くことが本当に嫌だった。また笑われる、馬鹿にされるという恐怖が私を襲った。しかし、家族へ迷惑や心配をかけたくなかったため、重い身体を無理やり動かして学校へ行った。教室へ入ると男子グループが私を指さして、「ゲップが来た」と言っていてクスクス笑っている。しんどい、辛い、死にたい。様々な思いが私の中で込み上げてくる。仲の良い友達の何人かは私をかばってくれたけれど、やはり「ゲップいじり」はエスカレートしていった。「ゲップくさーい」と男子グループの一人が言った。その瞬間、私の中で何かが切れた。ずっと我慢していた感情が全てあふれ、私は泣いていた。友達が駆け寄ってきて、先生の所へ連れていってくれた。先生は私の話を聞き、男子グループの子たちを叱った。その後は何も言わ

れず、下校することができた。帰宅すると母が急に私を抱きしめた。先生から連絡があったのだろう。これまでの嫌な感情が消え、私は泣きながらこれまでのいかりと悲しみとしんどさ、辛さなどを全て話した。母はただ黙って私の背中をさすりながら私の話を聞いてくれた。そして、「人が言うことなんて気にしないでいいよ。自分の名前に自信と誇りを持って生きてほしいな」とだけ優しく、しかし力強く言ってくれた。それから私はどんなことを言われても私らしく、自分に自信を持って生きている。

最近、誹謗中傷による自殺が増えてきているとニュースで見た。日本には、「表現の自由」が憲法によって保障されている。しかし、「自由」の意味を履き違え、それが誹謗中傷へ繋がっているのではないかと感じる。自殺する人や、辛い思いをする人を減らすためにも、「自由」とは何かを考え、相手を傷つけないように一人ひとりが気を付けて欲しいと思う。

私は、自分に自信を持つこと、人を傷つけることを絶対にしてはいけない理由を教えてくれた、「別府」という名字が大好きだ。